
魔王様の召使の君 番外編 / 輪郭のにじんだ夢

刑部 科

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様の召使の君 番外編 / 輪郭のにじんだ夢

【Zコード】

Z5954Y

【作者名】

刑部 科

【あらすじ】

巷では色っぽくて高慢で気位の高い美女と名高いナガネキナギは本当は泣き虫、弱虫で寂しがりやだった。

そんな彼女と、意地悪などある少年の話。魔王様の召使の君番外。全三話。非コメディ、非シリアルス？

1・「ねえ、あと少しだけ」

「ねえ、本当に君魔物なの？」

少年がくすくすと笑っていた。いかにも楽しげに。

「そ、そうです」

「そんなに泣き虫なのに？おかしいね」

少年はナギの髪を指先でつまみあげると、力を余り込めずに引っ張つた。

「やめて下さい」

ふるふると力なく首を振つて抵抗の意思を示しても、そんなことなど彼を抑止する力には繋がらないのだった。

ますますと笑みを深めると、少年はつまみあげた髪の毛の先を自分の指に器用に巻きつけて遊びだす。

「やめて下さい？……本当におかしいね。君は魔物なんだろ？」「そんな風にお願いなんてしないで、僕の手から勝手に奪い返せばいいじゃないか。ほら、簡単なことだろ？」「

ねえ？と楽しそうな光を目に浮かべて、少年は言つた。

ナギがそんなことできないことを分かつていて、その上での言葉だった。

「巷で君のことなんと言つているか聞いたよ。色っぽくて高慢で氣位の高い美女ナガネキ様　　なんだってね？……ねえ、どうが？」

教えて、と少年は耳元で囁く。

「ど、がつて・・・・・・」

「噂つて当てにならないね」

少年はナギの髪をぱつと手放すと、床に座りこんで泣いているナギの顎を指先でくいと持ち上げた。

「君は弱虫で、泣き虫で、寂しがりやだ。特別な力なんてもつっていない、只の脆弱な人間である僕の手をふりほどくことすらできない」

そうして、彼はナギの額にそっと口付けを落とした。彼女は抗わず、素直にそれを受けるだけだった。

少年 パックリノランは脆弱な人間でありながら、ナギの上位に立っているのだった。

魔界において、少年はナギの愛玩物という位置づけであり、ナギは彼の主人という立場であったが、眞実はその逆だ。初めて出会ったときから、もうナギは彼の虜だった。

どうしてだろう？

確かに彼は脆弱な人間で、彼女は彼など一呼吸する間に屠ることも叶う力ある魔物だというのに。彼の眼差しにさりとてているだけで、彼女は呼吸すら儘ならないほどだ。

思考が止まりそうになる。自分の手足も思い通りにならない。

『色っぽくて高慢で氣位の高い』演技も板につき、素を隠すことなど造作なかつたはずの自分はどこにいったのだろう？

魔物としてふさわしくなろうと虚勢を張つて演技していたが、それは上手くいっていると思つていたし、彼が現れるまではこれからも巷のイメージする『ナガネキ様像』は維持できると信じていた。色っぽくて高慢で氣位の高い美女ナガネキ様 世間での彼女イメージはまさしくそれで、彼女もそのイメージを損なわぬよう注意深く振舞つていたのだ。中身は全く真逆であつたにもかかわらず。

彼女は影で泣くことはあつても、人前で泣くことは無かつた。

『魔物らしくないから』。

それなのに、彼の前では全てを曝け出してしまつことを止められない。

出会いがいけなかつたのだろうか？

彼と初めて出会つたとき、彼女はやはり泣いていた。

パックは脆弱な人間な癖に、魔物である彼女に近づき、なだめる
ように背中を撫でてくれた。

「女人人が泣いていたら、慰めるものだ」「…」

そんな風にいつて。

後から、「好きな女の子なら慰めるより泣かせたくなるけどね」
とも言つていたけれど。

彼の方が彼女より余程魔物らしいのではないかとナギは思う。
ナギのような心の弱い者が魔物である」と血体が間違いなのかも
しない。

「可愛い可愛い泣き虫の”ご主人様”？ さて、今日はどんな風に
遊ぶ？」

とつてつけたようなご主人様、の響きが憎らしい。

それなのに、少年の声で心が震えてしまうのを止められない。

「返事がないと勝手に決めてしまうよ？ ねえ、あと少しだけ待つ
てあげるから、言いたいことがあるなら何か言つてご覧？ いえな
いの？」

口を挟む隙を与えてくれないくせに、そんなことを言つ。

ナギが口を開こうとするとき、彼は彼女が何か言葉を口にする前に、

「時間切れだ」

そういうて笑つた。

「……そうだね。君が持つてゐる装飾品の中に、力を封じるアイテ
ムがあつた氣がするな。あれをつけたらどうだい？ それで鬼ごつ
こしようか。そうでなければ僕に勝ち目が全くないからね。もし、
君が時間内に僕に捕まらなかつたら君の勝ち。僕に叶えられる範囲
の願いなら、一つ叶えてあげる。代わりに、君が時間内に捕まえら

れてしまつたら、君は僕の願い事を一つ聞く。簡単だらう?」

返事は? と問われてナギはすかさず頷いた。

余り時間を置けば、今度は彼が何を言い出すのかわからない。

「いい子だね、ナギは。じゃあ、今から君の力を封じるアイテムを探しにいこうか。勿論、君がどこかの馬鹿な魔物に狙われるのは嫌だから、危なくなつたら外してもいいけれど、もし外したら鬼ごっこはその時点で君の負けだよ? いいね」

「はい」

「じゃあ、行こうか」

についつと極上の笑みを浮かべて、パックはナギに手を差し出した。

そつと手を重ねれば、パックはぐいと手を引いてナギが立ち上がるのを手伝ってくれた。

一人並ぶと、わずかに彼のほうがナギよりも身長が低いのがわかる。

当然だ。人間である彼は、彼女の何分の1も生きていらない。

彼女にとつては瞬きするほどわずかな、10年と少ししか彼は生まれてから今まで過ぎていないので。

「鬼ごっこが終つたらおやつにしようね。昨日仕込んでおいたクッキーの種があるよ。あれを焼いてあげる。君のために」

だから鬼ごっこに負けても泣いちやダメだよ、とパックはナギの頭を優しくなでた。

彼は自分が負けることをちらりとも考えていないようだった

そして、その予想は間違つていないだろ?とナギも思った。

2・「ねえ、もつ見てくれないの」

暗闇の中、女性の悲鳴が響き渡った。
恐怖に引きつった顔。見開かれた目。
必死で逃げ惑う彼女は嫌な汗でびっしょりだ。
何かがぬちゃりと嫌な音を立てて、彼女に襲い掛かり

「そんなに脅えないでよ、作り物如きに」

ハチンと音を立てて、ハッケは小さな箱の扉を開じた。

するとガキに懇願を上げせん原因となつた幻影も同時に消えた。

腐れた肉と成り果てた 徒徧する死体が女性を襲ふ 恐怖映像

そんな恐ろしい幻景を閉じ込めたアーティムが最近この魔

手に入れたようだった。
そして何も知らないカギに披露して見せたのだ。

「ナギ、面白いものを手に入れたんだ。君に見せたくてもつてきたんだよ。一緒に見よう」

そういうつで。

一見して小さくて可愛らしい宝石箱のようだつた。

それを差し出すパックの笑顔もまたすばらしかつたので、ナギは

夢見心地のまま頷いたのだ。
そして、すぐ二後悔した。

「また泣いてる。目が真っ赤だよ、ナギ

涙で濡れた頬をパツクの指先がぬぐう。

透明な零が彼の指先で弾かれ、宙で砕けた。

「魔物もヘンなことをするものだね。君たちの中には余程こんな作り物よりも奇怪な姿をしているものもいるというの。…………それとも作り物だからこそ怖いのかな。どうなの、ナギ？」

「まだ涙を止められず、震えるナギには答えることが出来ない。黙つて首を横に振るだけだ。

「わからないの？」「ふうん」

彼はつまらなそうに唇を閉じると、蓋を閉じた宝石箱のようなアイテムをお手玉のように何度も宙に放り投げた。

ナギはその度にまたあの恐ろしいモノが見えないかどうか不安で仕方ない。

俯いて、ぎゅっとパックの服の裾を握った。

何かに縋りたくて仕方ない。そうでなければ自分を見失いそうだった。

「怖いの？」

聞かれてナギはすかさず頷いた。

「本当に君は弱虫なんだね」

おかしいの、と彼は本当におかしそうに笑った。

「でも、どんなに怖くても僕の服は何も君を助けてくれないよ？」

そう言って、パックはナギの手を自分の服から引き離した。

「あ……」

「ねえ、じつち見てよ」

彼女はまだ引き離された彼の服を見ていた。

まだ顔を上げるのが怖かつた。

彼の笑いを含んだ声に何かを感じる。

また、あの怖いものを見せられるのではないか
不安が湧き上がってくる。

「何もしないよ。信じてくれないの？」

「いえ、そんな」

「だったらこっち見てよ。ねえ、もう見てくれないの？」

そういう

悲しそうな響きでそう言われてしまってはナギも顔を上げやるを得ない。

恐る恐ると顔を上げると、ナギの頬に彼の手がかけられた。

そのまま頬と、耳たぶ、首筋をそっと撫でられる。

甘い疼きがナギの身の内を走った。

彼の手が優しく彼女の肌をなぞるたび、彼女はいつも甘く切ない感覚に陥るのだ。

「見た目は姫の方がお姉さんなのにね。泣き顔は本当に可愛こよ、ナギ」

パックがうつとりとした声で、ナギの耳元で囁く。

それはナギにとっては大変不本意なことなのに、彼に可愛いといつてもうべるならいいといつになってしまつ。

「君が可愛く泣くから、ついつい泣かせちゃうんだ、『ごめんね？』謝罪になつていないそんな言葉で謝られてしまうから、彼女は彼に何度も泣かされても怒ることができないのだった。

* * *

何度も背をさすりられて、ナギが漸く落ち着いたのを見計らつて少年は口を開いた。

「でも、魔物でも怖いものがあるんだね。世の中では僕は女性に怖いものはないんじやないかと思つていたよ」

パックは何かを思い出すような表情を浮かべている。

彼にそう思わせる何かが、過去にあったというのだろうか。

でも、女性

?

「あれ、何か不機嫌になつてゐる？」

「別に、なんでもないです」

「もしかして妬いてるの？やだな、ナギ」

「別に。人間なんかに妬いてなんて……」

「ナギは本当に面白いね。魔物は余り独占欲はないのかと思つてたよ。ほら、魔物の中には不特定多数の相手と付き合つような者も結構多いと聞くからさ。……そうでもないのかな？ そういうば、魔王様の側近はご執心の相手がいるんだってね。この間、誰かがそのせいで消されたと聞いたよ」

「先日。シイ＝タクエという者が……」

「ああ、そんな名前なのか。流石に僕みたいな只の人間に詳しい情報は回つてこないからね」

その割りに、彼はいろいろなことを知つてゐるし、今回みたいなアイテムをどこからか手に入れてくることもある。本当に不思議だ。

「一度見て見たいね、魔王様の側近にそつまでさせられる女性を。人間と聞いたけど」

「……」

「綺麗な顔が台無しになつてゐるよ、ナギ。心配しないで。別に純粹なる好奇心だから」

「……」

「おや、へそを曲げてしまつたかな。それじゃ一つ教えてあげる。さつき僕が思い出していたのはね、僕の姉のことなんだ」

「お姉さん……？」

「そう。怖いもの知らずというか、すさまじく全てに対しても鈍感といふか、思考が少し人とずれているといふか……とにかく、僕にはよくわからぬところのある姉でね。人間の女性の半分は黒くてテラテラしたゴミに集まる虫を嫌つてゐることが多かつたのだけれど、うちの姉はしげしげと観察しているくらい余裕があつたりしたし。怖いものがあるのかすらわからなかつたな。そういうえば、僕がここにくる少し前にいなくなつっていた気がするけど、どこにつちやつたん

だらうな

「消えた……？」

「うん。そんな気がするだけだけど。何しろ、僕の家は貧乏子沢山を地でいく家だから、一人一人いなくなつてもなかなか気付かないのさ」

人間は魔族などより血族の絆を尊いものと考えていると思つていたのだが、違つたのだろうか。

それとも、彼の家は特殊なのだろうか。

「うん？ 珍しいと思ってる？ 別にそうでもないと思うけど……まあ、うちに細かいことを考える人間が少ないせいもあるかもね。それに、一人一人消えたくらいで心配するにはうちの家族は多すぎる。そうでなければ、君についてなんてきてないよ、ナギ」

彼を魔界につれてきたのはナギだ。

彼は抵抗もせずに従つた。人間界からこちらに来るのはたやすいが、魔界から人間界に戻るのは魔族ならともかく、人間には酷く難しい。

一度と戻れないかもしれないのに、彼はそれを説明しても「いいよ」と二つ返事で彼女についてきたのだ。

「もしかしたら、この魔界にいるかもしねえ。僕の姉も　彼女なら、きっと魔王様でも怖いと思わないんじゃないのかな」

彼は首を傾げてそういった。

「そんな人間いる筈がありません」

そんな人間は、きっと魔王様に現在付き従つ只一人の召使くらいだろう。そういうえば、彼女があの魔王様の側近の思い人だったか。「まあね。あくまで仮の話だよ。実際、うちの姉もまさか魔界になんてきていらないだろうしね。僕と姉がこの魔界に一緒にいるなんて偶然、そうあるものじやないだろうし。あまつさえ、彼女が魔王様に会う確率なんてそれこそもつと低い低い可能性だろ？」

「ええ」

「だから、想像の世界のお話だよ。もしそうだったら面白いねっていつあくまで妄想さ」

まさかそれが現実に起きていることだと知らず、パックが「ありえない話だけれどね」と、一言で切り捨ててその話はお仕舞いになつた。

彼の魔王様の唯一の召使の名前はキミイリ・ノランといつ。
紛れもなく、少年の姉の名前だったが、幸か不幸か魔王様の召使のことは有名でも、その名前を知るものは殆ど誰もいなかつた故に、パックもナギもその事実に気付くことはなかつた。

3・「もし、また」に会えた

「そういえば、家族はいないの？」

ふと思いついたという風情でパックがナギを顧みた。

「私の？」

ここにはナギとパックの二人しかいない。

だから、話の流れでいえば多分パックの言っているのはナギのことなのだろう。

「うん。ここに来て暫く経つけど、ここで君以外に acestことは殆どないし。そもそも、魔物の生態系がよくわからないからどうなつているんだろうと、不思議に思つたんだ」

確かに、パックを魔界につれて来てから数日ぶりでない程の時間が流れていた。

その割りに、ナギが彼について知つてゐることが少ないと氣付く。彼について知つてゐるのはナギの誘いに応えてこちらに来てくれたこと。

どうやらナギを氣に入ってくれてゐるらしくこと。

それから、年は一〇と少しで、人間の中でも子供といつていい年齢だということ。

ナギを泣かせるのが好きで、でも笑顔も好きらしいこと。ナギに意地悪なこと。

それに加えて、彼に少し風変わりな姉がいることを最近知つた。その程度だ。

逆もいえる。ナギについてパックから何か聞かれたことも殆どなかつた。

これが殆ど始めてのことといつてもいい。

「勿論答えたくなれば答へなくていいよ」

ナギが悩んでいると思ったのか、パックは急いでそう付け加えた。パックは意地悪だが、ナギを本気で傷つけるようなことはしないように気をつけているようだ。

その心遣いが嬉しいと思う。

でも素直にそいつえ、パックはひねた答えを返して認めないだろう。

代わりにナギはパックの「答えたくないなら……」といふ言葉を否定するように首を振った。

「別に答えたくないわけではないです。何を説明しようか迷つていただけで」

「……そう?」

「ええ。質問の答えですが、私は自然発生タイプの魔族なので、家族はいません」

「自然発生タイプ?」

「ええ、魔族には一種類いるんですね」

「へえ、そうなんだ」

「ええ。自然発生タイプと、血族のいるタイプの魔族の一種類がいるんです。私のような自然発生タイプは係累をもたず、ある日突然どこかに生まれます。親も兄弟もいません。但し、私が子を生めば、子供は自然発生タイプではなく、血族のいる魔族となります」

そう説明すると、パックは感心したようにため息をついた。

普段、情け無いところばかり見せていくから、彼に感心させることが出来ると少し嬉しい。

「君みたいな自然発生タイプはよくいるものなの?」

「割合から言うと、血族のいるタイプよりは当然少ないです。ただ、自然発生タイプの魔族のほうが、力の強いものが多いので、上級魔族の中で言つと、自然発生タイプの割合の方が多いでしょ?」

上級魔族というのは、力の強い魔族の中でも特に認められたものだ。

ナギもその中のひとり。

自然発生タイプの頂点が魔王様だった。そして、その側近であるトリフェ様が血族のいるタイプの魔族の頂点といえる。

「そりなんだね」

パックはナギの説明に満足した体で、ひとしきり頷いた。

「あの、他に何か気になることはありますか？」

彼が知りたいというのならば、できるだけ教えてあげたいという気持ちになつた。

こんな風に満足そうな笑顔をしてくれるなら、なんだつて。

「気になること？ いっぱいあるけど……」「

「いっぱいですか？」

「うん、ナギについてね。一杯知りたいよ。でも一杯知るには、一杯時間が必要だね」

そういうつてパックが悪戯っぽく笑つた。

彼の言葉にナギは頬を赤らめた。

嬉しい、それから恥ずかしい。

「例えば、なんで君の顔は今赤いのかなつてこととか

「じー家族に会いたいと思う」とはあるんですか？」

パックに頭を撫でられながら、ふと思いついたことをナギは彼にたずねてみるとこにした。

「うしていとじちらが年上で、どちらが年下かわからない態度だが、純粹に生きてきた時間は明らかにナギのほうが長いに決まっているし、外見もナギのほうがお姉さんに見える。

けれども、考えてみれば彼はまだまだ幼いといつていい年齢だ。

幼い彼が、家族と離れているのはとても辛いことではないのだろ

うか？

家族が生まれた時からいないうぎには想像してみるとじか出来ない。

もし会いたいといつても、たやすく願いをかなえてあげることはできなけれど、それでも気になつた。

ナギが彼を魔界につれてくることなどなければ、彼は今でも家族と共に暮らしていたはずだ。

「寂しく無いといつたら嘘にはなるけど。どうせあのままではいらっしゃなかつたからね」

「どうせ？」

「いつたるう？僕の家は貧乏子沢山だったつて。食い扶持が増えれば増えるほど、生活は苦しくなるもんだ。きっと、あそこに残つていたとしても、遠からず僕は家を出たよ。仕事を探しにいかなければならなかつただろうね」

だから、ナギが気に病む必要は無いよ。

そう言つてパックは優しく笑つた。

「ああ、不安そうな顔して。本当に、君は僕より長く生きてるの？ 実は僕の方が大人なんじゃないかと思つてしまつよ」

ナギの身体を包むように、彼は後ろからそつと抱きしめてくれた。じんわりと背中が温かい。

「僕は幸運なんだよ。君がここにつれてきててくれたから。働きにわざわざ出る必要もなくなつた。その上、好きな子が傍にいてくれるんだよ？ 不満をいつたら罰が当たるね」

「そう、ですか……？」

「うん、そうさ」

パックはためらう様子も見せず肯定して見せた。

「でも、会いたい？」

「まあ、会えたら嬉しいけど。僕には今ナギがいるからね」

「では、もしここでまたご家族に会えたら？」

「え？ もしここで会えたら？」

彼には思いもよらぬことだつたらしい。。

パックが軽く田を瞠つた。そしてそれからにやりと笑つた。

「決まつてゐるだろ、逃げ出すよ」

どうしてですか、ヒナギが尋ねる前にパックは笑みを深くしてこういつた。

「ナギみたいな美人とどこで知り合つたのかなんて馴れ初めを聞き出せうとするに決まつてゐるから。そんなもつたいたいことができないわ」

ナギはあつけにとられたように口をぽかんと開けた。

上氣する頬を押さえる。

そして、どうしたらこんな子供が出来るのか、彼の家族に一度会つてみたいと思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5954y/>

魔王様の召使の君 番外編 / 輪郭のにじんだ夢

2011年11月20日03時17分発行